

教宣 せぶん

えッ！創立記念日が8月1日？

「今日は新会社の創立記念日です。」

8月1日の朝礼で、支社長が開口一番、そう切り出しました。言われた瞬間はピンときませんでした。しばらくして「新会社の創立記念日って言ったら10月1日じゃないの？」という疑問がわいてきました。おそらく、その場にいた多くの者が同じ疑問をもったはず。後で支社長にこの疑問をぶつけると「8月1日は旧東海社の創立記念日で、それがそのまま新会社の創立記念日になった」とのことでした。皆さんの職場でもそうだと思いますが、どういう経緯で旧東海社の創立記念日が新会社の創立記念日になったのか、いつ新会社の創立記念日が決められたのかなど、詳しいことは私たち従業員にはまったく説明がありません。

この「8月1日の創立記念日」にはどんな意味や背景があるのでしょうか？

規模や収保に違いこそあれ、東海社、日動社にはそれぞれのアイデンティティーがあり、両社はそれらを融合して新しい時代のパートナーとしてこの企業合併を決断したわけですから、誰が、どう考えても、新会社である東京海上日動社の創立記念日は、合併した10月1日とするのが自然です。それが、東海社の創立記念日に「片寄せ」されることにはまったく納得感がありません。率直に言って「N」が大変愚弄されていると感じます。東海経営は、まだ1年も経過していない合併よりも、百年も前の合併に端を発した創立記念日に「思い」があると言うのでしょうか？ はたまた、暗にこの新会社は旧東海社のものだと宣言しているつもりなのではないのでしょうか？ それとも、これも旧日動社で働いた者に対する嫌がらせのひとつなのではないのでしょうか？ 逆に、もし日動社の創立記念日だった1月25日が新会社の創立記念日になったとしたら旧東海社の皆さんはどう感じるでしょう？ いずれにしても衛星放送で登場した社長の言葉からは、私の疑問に対する答えは見つかりませんでしたし、旧日動社で働いてきた者への配慮や気配りというものがあったと感じられませんでした。これがマングローブを植える同じ手から繰り出された施策かと思うとガッカリしますし、この勢いではいずれ社名から日動の2文字がなくなってしまうのではないかと危惧します。

前号にも書きましたが、こうした動きの背景には、合併を決断した旧日動経営陣の退陣があると思われる。旧日動の経営陣が退陣するまでは、水面下でうごめいていたシナリオが、退陣に伴って公然と堂々と演じられていると感じます。狡猾な経営は、合併を決断した旧日動の経営陣を一掃したのを境に、日動社とは合併したのではなく、「吸収した」と歴史を塗り替えようとしているのではないのでしょうか。そう考えないと「8月1日」の説明がつきません。

システムから規定や運用、文化や風土・慣習に至るまで、すべてが東海社へ片寄せされ、私たち日動社に働いてきた者だけが、ただただ大きな「変化」を強いられてきましたし、東海社には、お互いが新しいものを作っていく、お互いが新しい世界に入っていくなどという発想が全くないことが、合併してわかりました。結局東海社は、何も捨ててないし、何も変えていないのです。市場が成熟した産業において、上位社が収保やシェアを伸ばしていく最も手っ取り早い方法は「企業合併」なのでしょう。「対等合併」という言葉で釣って、合併を決断させ、強者は何も変えず、弱者にのみ変化を強い、最後は強者が弱者を呑み込んでいくという弱肉強食のシナリオが、この「8月1日」を通して、はっきり見えてきます。

言うまでもなく、私たちの向き合う相手が、本音・本心で何を考え、何を狙っているのか、理解・学習・類推することはとても大切なことです。ここを見誤ってしまえば、その後のたたかいや運動が的外れなものになってしまいますし、取り返しのつかないことになりかねません。幸い私たちの組織には今回の「8月1日」のように「おかしい」と感じたことを率直に表現できる場があり、率直に表現できる空気があります。情報を共有できるシステムも確立しています。経営に「おかしい」と物が言えるアイデンティティーももっています。来期のたたかいにむけたオルグで、こうした狡猾な経営とたたかっていく基本的なスタンスも語られました。長い間、この東海経営と渡り合ってきた仲間の知恵も借りることができます。これは本当に頼もしいことです。

腹を決めて、覚悟して、私たちはこの道を選びました。少々のことでは動じない精神的な強さも兼ね備えています。むやみやたらにたたかうことが決して良いことだとは思いませんが、今後「8月1日」に見える東海経営による弱肉強食のシナリオが演じられてくる以上、ここはたたかわずにはいられない局面だと感じます。組合的にももちろんですが、「N」の魂にも火をつけて、狡猾な経営と対峙していきましょう。